

拾ったのが 本当に猫かは疑わしい3

ねこ沢ふたよ Nekosawa Hutayo



アルファポリス文庫

目次

第一章	拾ったのは騒がしい日々かもしれない	5
第二章	拾ったのは頼れる相棒かもしれない	108
第三章	拾ったのは温かい仲間かもしれない	135
第四章	拾ったのはとんでもない軍師かもしれない	223
第五章	拾ったのは忘れたくない今かもしれない	266

第一章 拾ったのは騒かしい日々かもしれない

彼氏である伊川正樹いがわまさきが会社の後輩である松本幸恵まつもとゆきえと浮気していることが発覚し、別れた夜。私、本田薫ほんだかおるが出会ったのは、モフモフの猫っぽい物体だった。

白い体に黒い縞しまの入った長毛種の猫のような生物せいぶつを、私は『モドキ』と名付けた。勝手に冷蔵庫を開けてビールを飲むようなふてぶてしいモドキは、時代劇が好きで人間の言葉を話すオヤジ臭くて不思議なやつ。

でも、この猫とは疑わしいモドキのお陰で、私はトイプードルのマロンを助け出し、猫好きの隣人である柏木優一かしきゆういちと出会い結婚して、可愛い愛娘まななめである理歩りほまで産まれたのだ。

初めての育児は大変だけれども、優しい優一さんとモドキとマロン、みんなに助けられて、私たちは楽しく暮らしていた。



一月。理歩の誕生日を控えたある夜のことだった。
夕食前の私の部屋。

猫モドキの目が、キラッキラに輝いている。

モドキの横には、もうすぐ一歳になる我が娘、理歩と、トイプーのマロン。

そして、テレビの画面には、『成敗將軍』が流れている。

お正月の特別番組『お正月だよ上様』で制作された番組。上様はご自身の跡継ぎと一緒に江戸の平和を守っておられる。

大立ち回りでバツバツと敵を斬りまくる上様のお姿に、モドキは釘付けだ。

「カッコイイ……」

時代劇を観てハアアと、感嘆の息を吐く猫なんて、世界広しといえども、この猫モドキだけだろう。

いや、猫かどうかは疑わしいが。

「モドキ、ねえ。それ何度目よ」

お正月明けからヘビロテで流れる時代劇。

モドキは、上様の一挙手一投足を覚えてしまおうという勢いで、この一月の間、

『成敗將軍』の録画を観まくっているのだ。

「成敗！」

「ワン！」

「ばー！」

画面の上様に合わせて、モドキとマロン、さらに理歩まで交じって楽しそうに声を上げている。

娘よ、猫モドキに洗脳されているぞ。

時代劇の成敗に満面の笑みを浮かべる乳幼児なんて、世界広しといえども、理歩だけかもしれない。

「おお、マロンも理歩も、見事な成敗であった！」

モドキがマロンと理歩の頭を肉球お手でポフポフ撫でれば、マロンの尻尾はピコピコ揺れて、理歩は手を挙げて喜びを現す。

いや。洗脳しないでよ。モドキ。
 齢一歳足らずにして、すっかり猫下僕じゃない、ウチの娘。

「モドー！」

褒められてテンションが上がった娘は、目の前にあるモドキのモフモフボテイにしがみつき恍惚としている。

その猫下僕仕草は、隣の部屋で夕食作成中の我が夫、優一さんそっくりだ。

「そろそろ、運んで大丈夫ですか？」

私の部屋の玄関を開けて、優一さんが顔を出す。

結婚してからも私たち夫婦は引越せず、隣同士という距離を保って生活している。これは、基本的に時間の合わない場合は互いに好きに過ごせるように、付き合っているときからたまたまお隣同士だったのを利用することだ。

「待って！ 針を片づけるから」

私はテーブルの上でクシャクシャになっている布を畳む。

優一さんが夕食を作ってくれている間、私とて、ただぼうっとモドキたちを見ていたわけではない。

保育園指定のお食事エプロン入れなるものを作っていたのだ。

『キャラものではない、高さど幅が別表通りのもの』

この指定をクリアしている規制品を見つけられなかった私は、本格的に離乳食が始まっている理歩のために、お食事エプロンを入れる袋を手作りしているのだ。

ええ、がさつ女子を自負する私だ。

裁縫なんて得意なわけがないのだ。だが、世にないものは錬成しなければならない。指を刺している回数のほうが、布を縫っている回数よりも多い状態で、チクチクと小さい袋を縫い続けている。

「まあ、真っ直ぐな部分が一つもない袋というのも珍しいが、頑張って作ったのであるから理歩も喜ぶであろう」

これは、この間作った私製作のお着替え入れを見た、モドキの第一声。相変わらず一言も二言も多い猫モドキだ。

「薫さん、ありがとうございます。僕も裁縫できればよかったのですが」

「いいのよ。てか、料理してもらっているんだから、このくらいやらなきゃ」

優一さん、優しい。

モドキとは大違いだ。

「さて……儂わしもそろそろ、仕上げるかの」

そう、私はモドキにも、理歩の保育園のための仕事を一つ頼んでいる。

紙オムツの名前入れた。

『ほんだりほ』と名前を入れられるスタンプをこのために買ったのだ。

スタンプをペタンと押して理歩の名前をオムツに入れる。猫モドキは、この作業をいつも容易たやすくこなしてしまふ。

「さ、危ないからの。理歩とマロンは少し離れて見ておくがいい」

理歩とマロンを少し離れさせて、モドキは紙オムツを円状に置き、スタンプを持ってその真ん中に立つ。

「わ、何が始まるのでしょうか！」

猫下僕ねこげやくを自負する優一さんが、理歩そっくりのキラッキラお目でモドキを見つめる。

「いざ、参る！」

モドキがスタンプを手を大立ち回りを始める。

ペタタタタ……！

モドキは、ビデオの將軍様のようにキレッキレの動きでオムツにスタンプを押していく。

「きゃー！」

「ワンワン！」

理歩とマロンが歓声を上げる。

「成敗じゃ！」

ペタンツと、最後の一枚にモドキがスタンプを押せば、理歩の興奮は最高潮となり、お尻をびよんびよんさせて喜ぶ。

「危ない！」

興奮しすぎてバランスを崩した理歩の体が、後ろ向きに倒れ始める。

私と優一さんが理歩のほうへ駆け寄ろうとするより早く、猫モドキが理歩の頭の下へ、モフモフのお腹を滑り込ませる。

「大事ないか？ 理歩？」

イ、イケメン仕草……

「モドロー！」

理歩はますますモドキに夢中だ。

いや、針仕事をしていたとはいええ、油断して離れていた私たちが悪いのだけれどもね。

「ヤバイ。モドキちゃんに勝てる気がしません」

あまりの理歩のモドキ溺愛^{でかい}っぷりに、優一さんが危機感を覚えている。

分かる。分かりすぎる。それな！　って、百回言いたい。

お母さんより、モドキがいいって、絶対に将来に言うに違いないのだ。

理歩。ほら、美味しいご飯だよ。猫モドキ以外にも目を向けようか。

優一さんが作ってくれた本日のメニューは、シチューだ。

ジャガイモ、にんじん、鶏肉^{とりにく}、ブロッコリー、玉ねぎなんかが、真っ白いシチューの中に浮かんでいる。

理歩はまだ食べられない食材も多いので、専用の離乳食も作ってくれている。

人間として産まれてまだ一年にも満たない理歩は、消化できない食材も、食べたことのない食材も多い。つまり、アレルギー反応を起こす食材があるのか分からないか

ら、不用意にあれこれと口に運ぶことは危険なのだ。

だから、少しずつ試して食べられるか確認している。それが離乳食だ。

消化できるように普通より柔らかくして、月齢に合わせた食材で。それはそれは手間のかかる作業なのだ。

理歩用の猫柄の小さな器^{うつわ}に、にんじんやブロッコリーが浮いた薄味のスープが入っている。

「さあ、理歩！　にんじんだよ」

優一さんがエプロンをかけて、子ども用の椅子に座った理歩の口元に、スプーンを持っていく。

理歩は小さな口を閉じて、開けてくれない。

「うー！」と言って、ブンブンと首を横に振る。

「食べませんね……」

優一さんが悲しそうな表情を浮かべる。

せっかく作ったのに、一匙目から全力拒否。これは悲しくないわけがない。

優一さんが理歩のことを考え、理歩に合わせて一生懸命に作った料理なのに、何が

気に食わないのだろう。

「僕の料理……駄目だめなんですか？」

「そんなことないよ。優一さんで駄目だめなら誰が作ったものでも食べてくれないよ」
だって、我が家で一番の料理上手は優一さんだもの。優一さんが作ったもので食べないなら、他の誰が作ったって駄目だめだろう。

「それじゃあ食わんぞ、優一」

マロンにご飯をあげていたモドキが口を挟む。

「え、何？ 何が原因なの？」

私は、首を傾げる。

「理歩は、自分で食べたいようだ」

モドキの言葉に、私は耳を疑う。

自分で……え、でもお匙さじ、まだ理歩は使えないのに。

「やってみましょうか」

モドキの言葉に、優一さんが同意する。

「そうね……」

優一さんが同意するならば、私にだって異論はない。

何事も試してみるのには、悪いことはない。

優一さんが、恐る恐る理歩に匙さじを渡してみる。

「あー！」

満面の笑みの理歩は、渡された匙さじをブンブン振り回す。

いや、喜んでいるけれども、食べないじゃない。

「理歩本人は、うまく匙さじを使いこなしているつもり満々じゃ。うむ、上手じゃの。理歩！」

「あー！」

いや、そこ、分かり合えているのは何よりだけれども、一向に食事は進まないじゃない。

ガッ！

突然、理歩の左手が離乳食の器うつわに突っ込まれる。

「ええっ！」

理歩の突然の行動に、私も優一さんも驚いてしまう。

右手に持った匙さしのアイデンティティを全無視して、理歩が器うつわの中を素手すででかき回す。世に言う手掴み食べなのだろうが、これは大変だ。

もう、理歩の服どころか、テーブルも床も食べこぼしだらけになる。

おお……これは、食べ物で遊んではいけないという文化で育った我々のメンタルを削る光景……

結局、優一さんが愛情たっぷりに作ってくれた離乳食は、理歩のおもちゃと化して終わってしまった。

「ふむ！ 理歩よ！ 見事な作法であった！」

「あー！」

いや……そこ、分かり合えているのは、何よりなんだけれどもさ。

モドキも理歩も、少し手加減願えるかな？ 私も優一さんも、メンタル削られまくりなんだけど。

せっかく優一さんが作ってくれたというのに、無惨に床のシミと化した離乳食を掃除する。

「モドキ、マロンに食べないように注意してあげて！」

「分かっておる。のう、マロン」

「ワン！」

猫モドキのモドキはともかく、マロンはわんこだ。

人間とは違うから、この離乳食の残骸ざんがいを口にするのは危険なのだ。

昭和の頑固親父がちゃぶ台をひっくり返すがごとく暴虐ほうぎやくの限りを尽くした理歩は、栄養補完としてミルクを飲んでご満悦まんえつである。

まあ……離乳食って、栄養を接種するというよりは、食事の練習に過ぎないのだから、これでいいのだろう。

お腹がいっぱいになってうつらうつらとした理歩を抱っこして、ベビーベッドに寝かせる。

できればもう少し起きておいて夜中に寝てほしいのだが、赤ん坊って大人の都合なんて全く考えないのだから仕方ない。

お気に入りのモドキそっくりのぬいぐるみを抱きしめて、ニコニコしながら眠る暴君理歩が、めちやくちゃ可愛く見えるのは、やっぱり私が親バカだからだろうか。

ぶつくりしたほっぺが真っ赤になっていて、触ればモチモチだ。

「今のうちに、急いでご飯食べてしましましょう」
床掃除を終えて手を洗った優一さんが、すっかり冷めたシチューを温め直してくれる。

「そうよね。起きたらまた大騒ぎだし」

私も手を洗って、ようやく食卓につく。

小さな子がいる家庭は、ご飯をゆっくり食べるのも大変なのだ。

シチュー、とっても美味^{おい}しいです。

優しい味わいで、疲れた体に染み渡る。

モドキとマロンは自分たちの食事を終えて、理歩の横で遊んでいる。

穏やかで幸せな日常生活だが、理歩が起きればまた目が離せなくなってしまう。

優一さんも私も、急いでご飯を食べる。

「昨日はゆっくり眠らせてもらったから、今夜は私が理歩と寝るね」

「ありがとうございます。じゃあ、保育園には僕が連れて行きますから、薫さんは朝ゆっくりしてくださいね」

「じゃあ、モドキたちは優一さんの部屋へ……一つ、いい？」

「为什么呢？」

「隣同士とはいえ……面倒じゃない？」

「分かります！ 理歩の寝かしつけ担当じゃないときにゆっくり寝られるのはいいとして、そのたびに玄関を出入りするのは大変ですよ。育児グッズのやり取りとかもありますし」

そう、このお隣同士に住んでいる状態で続けていた結婚生活だが、理歩が大きくなるにつれて面倒になってきたのだ。

理歩が保育園に通い出したので、私は今職場に復帰している。

保育園のお迎えに合わせて時短勤務だけれども、こうやって元の職場に戻れたことは、私にとってとてもありがたい。

そして優一さんも仕事をしている。

理歩の世話は、優一さんと私の部屋を行ったり来たりして行っている。そのため、結果として理歩は、二つの部屋を行ったり来たり。

できれば、壁をぶち抜いてしまいたくなるシーンも少なくない。

優一さんと私、それぞれの生活ペースを重視して続けてきたスタイルに間違いはな

かったが、理歩中心の生活スタイルではちよつと無理が出てきた。

「じゃあ、探しますか？ 引っ越し先」

「そうねえ。少しずつ、探してみようか！」

優一さんと私は、この住み慣れた家から新天地を探す決意をした。



次の日の職場での昼休み。

同じ部署の係長である柿崎と、後輩の幸恵と一緒にお昼を食べている時間に、私はスマホで物件を検索する。

何かと猫モドキの情報収集能力に頼りがちな私ではあるが、ここは自分でも探してみるのがいいだろう。

理歩の育児でも主導権を握られっぱなしなのに、住居まで猫頼りはよくないのだ。ええと……まず、どの辺りで探すかよね。

保育園を転園したくないなら、近いほうがいいよね。

じゃあ、職場のことも考えて最寄り駅は変えない……

いっそ、もう少し駅の近くにすれば便利じゃない？

検索して出てきた物件の家賃の高さに、私はドン引く。え、ちよつと駅に近いくだけでこんなに高くなるの？

うーん。今、優一さんと私の部屋を合わせたよりも狭くなってしまつ……ええつと、どんな広さの物件ならいいのだろう。

物件の平面図を何枚見ても、あまりイメージが湧かずに私は悩みまくる。

「わ、薫さん！ 引っ越しですか！」

「な、何よ！ 横から人のスマホ見ないでよ」

幸恵よ、なぜ、勝手に人のスマホを覗いていいと思ったのか。

そういうところ、価値観が違いすぎて理解不能なんだけれども。

スマホなんて、個人情報のお宝庫ではないか。落としただけで恐怖体験をする代物なのに、横から覗くのは明らかにマナー違反だろう。

「だって、私と柿崎係長と薫さんの三人で食べているのに、ずっと夢中だから」

「人それぞれ事情があるでしょうが。勝手に見るのは失礼でしょ！」

幸恵に私よりも早くツツコミを入れてくれたのは、柿崎だ。

ありがとう、柿崎！ 出世しても、心の友だ！

「はあい」と、幸恵がまるつきり納得していない返事をする。

いや、幸恵、そろそろ気を遣うことも覚えようよ。

周囲は、幸恵にばかり合わせていられないんだよ？

「で、薫さんは、引っ越しするんですか？」

幸恵……お前、絶対に分かっていないだろう。まあ、いいけれど……

「うん。今すぐではないんだけど、そろそろ引っ越しを考えないと、住みにくくなってきたから」

「でしよう？ 全く！ 薫さんはいつもギリギリで、先のことを考えなさすぎなんです！」

いや、そうだけれども、お前にだけは言われたくないぞ、幸恵よ。

幸恵の頭からはすっきり抜けているが、七年付き合った私の元カレを寝取ったのも、今、私の家で幸せに生活しているマロンを男を誘うのに利用したのも、幸恵だ。

それで、どれだけ私が大変だったと思っているんだ。

まあ、昔のことだし、今さらどう言わないけれども。

その後、幸恵は結局私の元カレの正樹とは別れて、今のダーリンと結婚した。

今はこうして一緒にランチを食べることもあるけど、それでも迷惑をかけられたことを忘れたわけではないのだ。このやろう！

「で、どんなところ探しているの？」

幸恵を全無視して、柿崎が聞いてくる。

「できれば今住んでいるところの近所で、犬猫飼育可能な物件。広さは……どうしよう」

「なんだ。まだ本当に考え出したところなんだ」

「そうなのよ。だから、今は希望する地域の相場を確認しているんだけど……ね」

「どうしたの？」

「高いのよ。家賃が思ったよりも。これだと、もっと今よりも駅から遠いところに住まなきゃいけないかも」

私はため息をつく。

そもそも、ペット可の物件が少ない。それに私の希望している駅では、駅前の賃貸

物件でファミリー向けの間取りでペット可、これが思った以上にないのだ。

あっても高くて、とても毎月家賃が払えない。

「いっそ、購入はどうですか！」

幸恵が口を挟んでくる。

「こう……にゆう？」

賃貸しか探す気のなかった私に、思わぬワードが降ってくる。

「そうですよ！ 薫さん！ 家賃を無駄に払うくらいなら、いっそ購入して自分の家にしちゃえばいいんです」

こう……にゆう……

え、家一軒って、高いじゃない。

一千万……いや、二千万や三千万や、場所によっては億するじゃない。

念のために、最寄り駅の物件の価格を調べてみる。

さすがに億はいかないけれども、いや、無理だし。

とても我が家では払えそうにない価格に、私は固まる。

「無理……」

「そうですか？ だって、頭金をちゃんと払えば、家賃よりも月々の返済が安くなることもありますよ？」

どこかの不動産ブローカーのような幸恵の言葉。

いや、その頭金が、そもそもないんだってば。

推し様のグッズ、いくつか我慢して貯金するべきだった？

いや、必需品だから！ 推し様のグッズは！

推し様のグッズがなければ、生きてはいけないじゃないか。

世の中の厳しさから目を背けて、とりあえず、私はスマホをそっと閉じた。

明日考えよう。うん……

結局、何も決まらないまま家に帰れば、優一さんが楽しそうにモドキとマロンに囲まれて理歩を抱っこして座っている。

「やはり、熊本城を参考にすべきか！ あれは名城じゃ！」

猫モドキが何か言っている。

「薫さん、おかえりなさい！」

可愛いものに囲まれて満面の笑みの優一さん。

うん、楽しそうで何よりだよ。

「ただいま、何やってるの？」

「引越するならどんな家に住みたいかって、みんなで話してたんす」

なるほど……それで熊本城……

いやいや、無理だから。知らないから。

熊本城なんて住まないし、住めないから。

未来の我が家は、別に城攻めに備えなくていいから。

「モドキ……住むとしても普通のマンションよ？」

「分かっておる。名城を造る予算なぞないことは、火を見るより明らか！ この家に

あるはずがないではないか！」

いや……予算ないのはそうなんだけれどさ、そんな断言しなくたって。

火を見るよりかは明らかになっていないと思うのよ。マンション購入の頭金もない

我が家だけれどもさ。

「しかるに、名城の名城たることを做うことは、大切であろう？」

「そう？ だって城よ？ 現代の一般市民の住まいのなんの参考になるのよ？」

戦を仕掛けられる予定は、とりあえず我々にはない。

堅牢な石垣も、武者返しも、鉄砲で撃つための穴も必要ないはずなのだ。

「薫、まだまだだな」

猫モドキが不敵な笑みを浮かべる。

「何よ？」

なんか役に立つことがあるのか？ 城。

「天守閣じゃよ！ 泰平の世であるからこそ、見渡すために重要になるではないか！」

「天守閣……」

要は、高いところから見渡したいってことだろうか。

「なるほど」

いや、優一さん？ そこ、納得しないでよ。

ただでさえ、予算的に色々と難しいのに。

「きやー！」

「ワン！」

モドキの意見に、理歩もマロンも大喜びしている。

この家には、猫下僕ねげほくしかいないのであろうか？

いかん。我が家の泰平たいへいを守るために、ここは私がしっかりと意見しなければ！

「却下。猫タワーあるでしょ、猫タワー！」

「なぜじゃ！ 猫タワーでは市中しちゆうが見渡せんではないか！」

モドキが不満そうにバンバンとコタツの天板を叩く。

高いところから見渡したい。

モドキはほぼ猫だし、その意見は分らないが、ここは却下だろう。

「予算がないの！ 他に色々あるでしょう？ 大事なことが！」

「うぬぬぬ！ 名城めいじょうのよさが分からぬとはっ！ 加藤清正公かとうきよまさこうがどれほどの知恵をあ

の城に……」

「コンセプトが違うでしょうが！ 我々の家とは！」

そうよ。住む目的が違うのよ。我々の家とは。

加藤清正公の知恵は、ささやかな予算に合った生活を望む我々には、全くもって必要ないのだ。

「薫さんは、どんな家がいいんですか？」

「え……私？」

優一さんに聞かれて、一瞬戸惑う。ええっと、理想の家か……どうだろう。

「えっと……保育園に近い家……生活しやすい広さで……」

「つまり、みんなで泰平たいへいに過かごせる家であらう？」

モドキが口を挟む。

「え、違……違……わない？」

あれ？ 違うよね？

そもそも、泰平たいへいってなんだ？

猫モドキの口車くぐりぐるまに乗せられて、私は混乱こんらんしてくる。

「やはり、城の研究は必要じゃな！」

へっばこな私をうまく言いくるめた猫モドキが、ドヤ顔で笑った。

さて、夜遅くの晩酌ばんしやくタイム。

本日は、理歩は優一さんと就寝。てことで、私は飲酒ができるのだ。

ワクワクして自分用のお猪口ちよこを持って待っているモドキに、ビールを注いであげて、残りは私が飲む。

「ハァー！」

二人してビールを飲んで大きな息を吐くと、マロンがジト目で見てくる。

マロンは普通の犬だから、モドキと違って人間の言葉を話しはしないが、言いたいことは目を見れば分かる。

ええ、幼子のいる母とは思えない諸行だって言いたいのだろう。

こういうことを心おきなく楽しめるのは、優一さんも育児と一緒に頑張ってくれているから。

優一さんによると、ペンギンのような協力し合う育児がやりたいという話だ。

ペンギン育児さまである。ありがとうっ！ 優一さんもペンギンも！

「しかし……よいのか？ 薫」

「何がよ？」

「今のような、隣同士の部屋で生活する気軽さは、完全なる同居を始めてしまえば不可能になるぞ」

……そうか。そうよね……

育児に関してはちよっと不便なところもあるし、寂しさもあるのだが、プライバシーを大切にする上では、とっても便利な住まい方だ。

推し様の動画を観ているときに、ドン引きされる恐れもないし、靴下を丸めて放置しているだの、冷蔵庫のプリンを勝手に食べただの、面倒な喧嘩けんかをせずに済むのだ。

寝る時間も、出掛ける時間も、ビールを飲むことも、誰にも文句は言われない。

まあ、理歩の世話があるときには、もちろん理歩を優先しているのだが、それでも完全に同居するよりも自由に振舞いやすい。

「特に、優一は綺麗好ききれいであろう？ ガサツな薫が掃除した台所では、不満が残るのではないか？」

「え……そうかな……」

モドキに言われて、私はドキリとする。自信は全くない。

だって、自分が納得いくようにしか掃除なんてしない。

気づかないところで、至らぬ点があっても分からない。

優一さんのほうが女子力高いし。

「せめて、それぞれの部屋は確保すべきよね……」

ということとは、リビングの他に二部屋は必要になってくる。

それに何度も引越すのは嫌だから、理歩の部屋も確保しておきたいよね……三部屋、独立した部屋。

スマホで検索してみれば、ずいぶんと高い家賃の部屋が並んでいる。

「やっぱり、高くなるよね……家賃……」

ビールの肴さかなにするには、とても世知辛い話。

ううっ、せっかく久しぶりのビールなのに、味気なく感じるではないか。

「仕方なかろう。全部を満たすのが無理であるならば、優先順位を決めて挑むのじゃ」

「そうよね。とりあえず、希望を書き出してみようか……」

紙の上に並べたみんなの希望は、『保育園近く』『今と同じ駅』『独立した部屋』『収納がたくさん』『キッチンが使いやすい』『天守閣』『堅牢な石垣』『ペット可』『予算内の家賃』『駅近く』『ワンコが走りやすいフローリング』。

『天守閣』と『堅牢な石垣』はそもそも除外するとしても、どう考えても全部は無理だと思われる条件だ。

「これは……無理じゃない？ 引越し」

私は怯むひる。今の住まい、ワンルームってこと以外はとも満足しているのだ。何より、住み慣れた場所だし。

「ワン！」

「おお、そうじゃの、マロン。マロンは聡明じゃ」

尻尾をピコピコと振って満足そうなマロンの頭を、モドキが撫なでて褒ほめる。

「何？ マロンは、なんて言ったの？」

「自分たちで考えていても分からないなら、専門家に聞けばいいでしょ？」と専門家……この場合は、不動産屋さんに行くってことだろうか。

なるほど。それは確かに賢いかも。

ひよっとしたら、思わぬいい案も出てくるかもしれないし。

今度、優一さんと休みが合うときにも行ってみよう。

「では、そのときまでに僕も勉強しておくかの！」

モドキがビデオのリモコンを操作する。

テレビのモニターに大写になったのは、『成敗將軍』の上様だった。

上様は、疊の部屋で家来を前に『面を上げい!』と命じている。

「は? どうして、これが勉強になるのよ?」

「江戸城といえは、名城であるが!」
名城……

「あれ? モドキ、あんたの間まで、熊本城がどうの加藤清正がどうのって言うていなかった?」

そうよ。あれだけ熊本城大好きだったじゃない。

腑に落ちない私を前に、モドキがニヤリと笑う。

「愚かなり、本田薫! 江戸城といえは、加藤清正公の手が入っておるのじゃ!」
知らんわ。そんなこと。

加藤清正公の基礎知識は不動産探しに必要なものだ。
我々本田家は、築城する予定はないのだ。



次の日の朝、保育園に理歩を連れて行くと、ママ友の遠藤さんが声をかけてくる。

「本田さん! おはよう!」

遠藤さんに抱っこされて美沙ちゃんが寝ている。

「遠藤さん、おはよう!」

保育園に子どもを預けたらそのまま出勤する人が多いから、あまり立ち話はしないが、遠藤さんとは保活で園の見学をしたときからの付き合いだ。

「ね、聞いた? 新しい先生のこと」

「ううん? あ……上のクラスに何人か新しい先生が来るってお便りに書いていたような気はするけど……」

正直に言おう。

保育園からのお便りは、持ち物と行事のお知らせくらいしか読んでいない。

園長先生の長い季節のご挨拶や、細々したことは、読み飛ばしている。

「なんか……その中の一人が、男の方なんですって」

興味津々な遠藤さん。

サスペンス好きで、つい時刻表でアリバイを考えてしまう性癖をお待ちの遠藤さん

には、変化は事件の始まりなのだろう。

目をキラキラさせて、ワクワクしている。

「ウチの園では珍しいわよね、男性の保育士！何か事情でもあるのかしら」

「いや……でも、最近増えているじゃない」

そう、昨今の世の動きは、男性も保育士を仕事として選ぶことを否定していない。むしろ増えてきているし、力仕事も多い保育士だから、男女どちらもいてくれるほうが、保護者としても園としても助かると思う。

「ほら、あの人！」

遠藤さんの指差す方向を見れば、園指定のエプロンをつけた男性の姿が目に入る。

「げ……」

私の喉から、潰れたヒキガエルのような微妙な声^もが漏れる。

見覚えのあるその顔は、七年付き合った挙句に後輩の幸恵と浮気した元彼、伊川正樹であった。

「わ、何？ 本田さんの知り合い？」

名探偵すぎる遠藤さんが、事件の予感^{きき}に嬉々としている。

いや、事件が起こるのは困るのだ。

年長さんのクラス担当みだし、そんなに接する機会はないはずだが、私の背中には嫌すぎる汗が流れる。

この保育園は気に入っている。

園長先生は子どもたちの成長をしつかり見てくれるし、遠藤さんとは仲良くなつたし。

でも、でもね……トラブルは避けたい。

愛する可愛^{かわい}い夫、優一さんになんの不満もないし、今さら正樹にトキメキなんて微^み塵^{じん}も感じるわけないが、顔を合わせるのは気まずいじゃないか。

だって正樹と別れたときみたいに、娘の通う保育園で保育士の先生をぶん殴るのは、やってはいけないことのはずだ。

ど、どど、堂々としていれば、ひょっとして向こうは、気づかないんじゃないかな？

だって、もうだいたい会っていないし。直接話すことは、ほばないだろうし。

落ち着け。落ち着け。

「あ？」

理歩が私の動揺に気づいて小首を傾げる。クリクリのキラキラお目目が、私を心配してくれている。

こんなときでも、ウチの子可愛^{かわい}い！

理歩のもちもちほつぺをいじれば、少しは心穏やかになってくる。

「ねえ、本田さん？」

と、ともかく、この名探偵遠藤さんを、なんとか誤魔化さないと！

トラブルも事件も困るのだ。

保育園は平和であるべきで、事件はいらないのだ。

「いや、以前会社を辞めた同僚に似ている気がしたから、ビックリしただけ」

「あら、じゃあ本人を呼んで確かめたら……」

「本人に確かめる？」

声、裏返ったじゃない。

無理、無理だから！ 本人とは一ミリも話したくない。

「そんな仲良くなかったし、てか、どちらかと言うと憎しみ合っていたくらいだった

から！」

「憎しみ合っていた！」

あ、しまった。

遠藤さん喜んじやった。

その日の夜、家に帰ってから、私はモドキに相談する。

「どうしよう。どうしたらいい？」

「ひゃんにゃによは、ひやしにひはひゅひよも」

モドキのモチモチほつぺは絶賛、理歩に引つ張られ中で、ちよつと何言っているのか分からない。

まだギリ0歳児だから、力も弱いし放っておいたが、そろそろ止めるべきか。

理歩をモドキのほつぺから引き剥がせば、モドキがふうつやれやれと、引つ張られていた自分のほつぺをさする。

愛しのモドキと離されて理歩は不満そうだが、これは我慢させるべきだろう。

「で、なんだっけ？ 別れた元カレが、保育士となって現れたと？」

「そう……」

「別によいではないか。互いに放っておけば」

「え、そう？」

そんなに焦ることではないってこと？

「距離を保^{たも}って近づかねば、どうってこともあるまい」

「そう……かなあ……」

でも……まあそうだよな。

だって今は無関係な人だもの。

猫モドキの言う通り、気にしすぎなのかもしれない。

「だが……」

「何？」

「優一には報告しておけ」

「優一さんに？」

なんでもないなら、優一さんにも言わないでいいではないか。

心配をかけるくらいならば、黙っていたほうがよくない？

「何かあったときに、なぜ黙っていたかと思うであろうが。こういうものはこまめに状況を説明しておくべきなのじゃ」

「なるほど……」

それは、そうなのだ。

私はいつもそれで失敗している。

恋愛感情のまるでない男性の同僚と話しているところを優一さんに目撃されて誤解されたり、妊娠検査薬の結果を報告せずに優一さんに悲しい思いをさせたり。

今回こそはモドキの言う通り、まず優一さんに報告することで、悲しい思いをさせないようにしなきゃいけない。

「モドキ……」

「なんじゃ？」

「ちよつと練習させてくれる」

そう、こういう報告って、言葉の間違えたら誤解を招きそうじゃない？

最悪なのは、私がまだ正樹に一ミリでも好意があると誤解されること。

そういう誤解が重なって、やってもいない浮気を疑われるなんて真^ま平^{びら}ごめんだ。

「仕方ないのお……ほれ、言ってみろ」

「うん。ええっと……新しい保育士さんが元カレだね。ビックリしたんだ」

「ほう、元カレとな。ふむ。薫は僕にどうしてほしいのじゃ？」

「待って、モドキ！ なんかモドキの言い方だと、優一さんのイメージに大江戸が混じる。なんか調子出ない」

できれば、もうちょっと優一さんに寄せて話を進めてほしい。これじゃあ、練習に
ならないじゃないか。

猫モドキが露骨に面倒くさそうな顔をする。

「僕ほどの千両役者をただで演じさせようというのが気に食わない。そうだな、猫様
ステイック、二本。それで手を打とうではないか」

「くっ！ 仕方ないわね。一気に食べたら体に悪いから、一日一本ずつよ！」

背に腹は代えられない。

ここは交渉に応じておこう。

「では……コホン！ そうなんですか？ 薫さんは僕にどうしてほしいのですか？」

少々真似している感満載のふてぶてしい言い方だが、仕方ない。

「信じてほしい。私、全く向こうに気持ちなんてないから」

「薫さん、本当ですか？ 嬉しいです」

「信じて！ 私が好きなのは、貴方だけなの！」

「僕もです！ 愛しています！」

猫モドキと私は、手と手を取って見つめ合う。

いや、何やっているんだらう私。

ちよつと馬鹿らしくなって振り返ると、微妙な顔で玄関に立っている優一さんが
いた。

「えっと……何をやっているんですか？」

猫モドキの演じる優一さんモドキではない、本物の優一さんが小首を傾げている。

その仕事、理歩そっくりで可愛いな。

……ではなくって、ええっと……

「えっと、練習……」

「？ はあ……？」

分からないよね、そりゃ、この状況。

私もよく分からなくなってきた。

優一さんが帰ってきたなら、夜遅くなる前にやらなければならないことは、山ほどある。

理歩にミルクを飲ませて、お風呂に入れて、自分たちの食事や入浴も済ませる。乳幼児のいる家庭として慌ただしく動き回って、ようやく一段落ついた頃には、もうヘトヘトだった。

優一さんの腕の中では、理歩がうつらうつらし出した。

つい、このまま正樹のことはうやむやにしたいくなるが、そうもいかないだろう。

とりあえず、元カレが保育士にジョブチェンして現れた悲劇は、優一さんに伝える。モドキと練習した成果が多少はあったのか、思ったよりもスムーズに説明できたと思う。

なんだか複雑そうな表情の優一さん。

「そうでしたか」

「そうなのよ」

あれ、また私は失敗して、優一さんに不要な心配をかけてしまったのだろうか。

猫モドキの口車に乗って正樹の登場を伝えたが、必要なかったか。

「どうでしょうか……」

「どうって？ 理歩を転園させるのは、嫌よ」

「もちろんです。せっかく理歩が保育園に慣れてきたというのに、転園なんて負担はかけたくないです」

優一さんの言う通りだと思う。

転園させたら、理歩は不安になってしまっただろう。

どうしても譲れない事情があるならともかく、元カレの一人や二人……てか現状、面倒な元カレなんて存在は、正樹くらいしかないけれども。

「大丈夫よ。そんなに心配しなかったって、向こうはこちらに気づいてなさそうだったし、向こうはもっと大きな子担当みたいだし。我々との接点は皆無じゃない？」

「でも、理歩を送り迎えるときに目が合うとか」

「合ったとしても保育園よ？ 私は子持ちなんだから、何もしてこないわよ」

「そうでしょうか……」

ものすごく不安そうな表情を優一さんが浮かべる。

何がそんなに心配なのだろう。

だって、そもそも私には、全く向こうに対する恋愛感情は存在しないのだ。

顔がチラチラ見えて不愉快^{ふげいか}なだけで、避^さけておけば不安はないだろう。

「だって、理歩の名前も薫^{かほ}さんの名前も、『本田』でしょ？ ひょっとして、『本田理歩』で登録されているのを見て、薫^{かほ}さんがシングルマザーだと勘違いして寄ってくるとか……ないですかね？」

お……確かに優一さんの言う通りだ。

世間一般的には、女性のほうが結婚のときに姓^{せい}を変える場合が多い。

しかし、我が本田家では、私の姓である『本田』に、優一さんが『柏木』から変更してくれたのだ。

なるほど……その可能性は考えなかったな。

「でも、向こうが私に興味あるとは限らないし」

そうよ。伊川正樹とは、七年も付き合ったから知っている。

あれは若い可愛^{かわい}い子が好きなのよ。だから、松本幸恵と浮気したの。

……まあ、ぶん殴^{なぐ}って別れてスッキリしたから、今さらそれを恨んではいけないけ

れど。

だから子どもを連れて私にどうこうなんて、向こうも考えないはずだ。

なんだ。考えれば考えるほど、平気な気がしてきた。

「ふわあ！」

理歩があくびをする。

「ほれ、そろそろ寝かしてやらんと、また朝にぐずるぞ？」

モドキがマロンと一緒に理歩を覗き込む。

理歩は眠いくせに一生懸命にモドキに手を伸ばす。

可愛^{かわい}い。うん、我々はいらない心配をしている場合ではないのだ。

だって、こんなに可愛^{かわい}いものを育てるのに忙しいのだから。



優一さんがしばらく理歩の保育園の送り迎えを代わるって言うてくれたけれど、私は断った。

だって、そんなの不便だし。ママ友の遠藤さんともお話したいし。理歩の保育園での様子が少しも見られなくなるのも嫌だし。

というわけで、優一さんと話し合いをした次の日の朝、出勤前に理歩を保育園に連れてきたものの……

いるんだよ。やつが。入り口に。

門を通り過ぎて、園舎の入り口のところで、営業マン時代に培^{つちか}った笑顔で園児のお出迎えをしている。

他の園児やママさんの相手をしているから、なんとかバレーずにスルーして通り過ぎたいのだが。

なぜ、入り口付近にいるのか。

ちよつとは中に入っていてくれないと困るのだ。

私は正樹に存在を知られたくない。

正樹に見つかからないように、保育園に侵入できないものか。

そう思うのだが、以前に窃盗事件があったから、この園のセキュリティは強化されているのだ。この入り口以外から侵入するのは難しいだろう。

……そうか、正樹が外に出て、朝から保護者ににこやかに挨拶しているのも、男性保育士もいてセキュリティが考えられているのだと、アピールしているってことか。

ちくしょう、有能だな園長先生！

さすが、私たちが見込んだ教育熱心な先生。

セキュリティはばっちりだ。

いや、こんなところで足止めをくらっている場合ではないの。

私は会社に行かねばならぬ。

ただでさえ部署には時短勤務にでもらっているし、みんなに協力してもらって仕事しているのだ。

遅刻はよくない。

この園の塀に一日中へばりついているわけにはいかないのだ。

「い、行くかあ」

気合いを入れて一歩踏み出すが、足取りは、最強になるためにおもりをつけたヒーロー漫画の登場人物よりも重い。

くうう。動け、足！

「……何……やっているの？」

後ろから観察していたのだろう。

名探偵なママ友、遠藤さんが、あまりに不審な私の動きに声をかけてくる。

「ああああ……あのう……」

猫が話すほうがいくらかマシなのでは？ という、うめき声に似た意味不明の返事しか私はできない。

「ああ……」

正樹が笑顔で園児たちに挨拶しているのを見て、遠藤さんが何かを察してニヤリと笑う。

「事情……教えてくれる？ そうしたら協力してあげる」

キラッキラの瞳で事件を期待する遠藤さん。

私はこの名探偵を前にして、自白する以外の術を知らなかった。

「そう……ふうん、元カレなんだ……それは気まずいわね」

「そうなの。でも、全く未練なんてないし、向こうはたぶん気づいてもいないし」

「で、これ以上関わりたくないから気づかれなくて、ここで困っていたと」

立ち読みサンプル はここまで

遠藤さん、やたらと楽しそうだ。

ワクワクしている遠藤さんの胸の高鳴りが聞こえてきそうだ。

「任せて！ そういうの得意なの！」

ミステリとサスペンスをこよなく愛する遠藤さんが、自信満々に言い放った。

いや、毒殺とかは望んでないからね。

すみませんが、穏便によりしくお願いいたします。

ということ、遠藤さんは作戦を考えてくれた。

遠藤さんの考えた作戦はこうだ。

まず遠藤さんが先に行つて、正樹と話をする。

そして、何かと理由をつけて建物の中に引つ込ませた瞬間に、私が入り口を走り抜けて理歩のクラスまで向かい、担任の保育士さんに理歩を預けて帰る。

「いい？ 一瞬でも気を抜いたら、この犯行はバレちゃうの。アウトだから！」

いや、犯行つて。別に犯罪はしていないのだ。

元カレに見つかりたくないだけで、アリバイトリックは必要ないはずだ。

でも、協力してくれるのは心からありがたい。